

社会技術研究開発事業
令和4年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独
の一次予防」

伊藤 文人

(高知工科大学 フューチャー・デザイン研究所 講師)

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	3
2-3. ロジックモデル	4
2-4. 実施内容・結果	5
2-5. 会議等の活動	12
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	13
4. 研究開発実施体制	13
5. 研究開発実施者	14
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	16
6-1. シンポジウム等	16
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	16
6-3. 論文発表	16
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	16
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	17
6-6. 知財出願	17

1. 研究開発プロジェクト名

シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

1. プロジェクトの達成目標

(1) スモールスタート期間終了時

スモールスタート期間に達成する項目は(1)社会的孤立・孤独に関わる要因の特定やニーズ探索、地域住民の健康調査、(2)国内外での高齢者コミュニティビジネス等の事例を研究し、CSを継続運営できる要素をリサーチ、(3)水上村におけるCSの立ち上げである。

(1) 社会的孤立・孤独に関わる要因の特定およびニーズ探索については、フィールド調査と心理・脳・健康調査を使用した質的/量的混合アプローチを用いることで、当該地域において特に孤立・孤独に関わる要因や、どのようなCSが求められているかなどを明らかにする。また、CSが孤立・孤独リスクや健康に対しどのような影響をもたらすか検証する上でのベースラインデータについても取得する。

(2) 「海外や日本での高齢者コミュニティビジネス等の既存の事例を研究し、CSを継続運営できる要素などをリサーチ」では、これまで高齢者コミュニティ支援に関わる先行研究の調査に加えて、(1)イギリスやオーストラリアなどのCS先進国においてCSの継続運営のための仕組みや工夫について調査、国内の高齢者コミュニティ支援に関わるNPOなどの活動・経営に関する調査を行う。

(3) 2023年後半を目処に熊本県水上村においてCSの立ち上げを行う。事前に実施するニーズ調査に基づいてプログラム内容の選定を実施し、本格研究開発期間でのCS本格運営を目指す。(1)～(3)は本格研究開発期間に実施するシチズンサポートプロジェクトの基礎をなすものである

(2) 本格研究開発期間終了時

本格研究開発期間に達成する項目は、(1)水上村および札幌市におけるCS運営とその効果検証(シチズンサポートプロジェクト)および(2)可視化ツールの開発と社会実装である。

(1) CSが高齢男性の低い社会参加率を改善するか、社会的孤立・孤独の一次予防システムとして有効に機能するか、健康面にも好影響を与えるかについて、フィールド調査および心理・脳・健康調査から検証する。また、地方部でのCS運営と都市部でのCS運営を通し、地域特性に関連した要因(地域要因)と地域に依らずCS運営に中核的な役割を果たす要因(中核要因)を見つけ出し、暫定的なCSの定義である「男性がわくわくできる居場所」を実現するためのノウハウを蓄積していく。なお、インタビューデータや行動データ、健康に関連するデータはどちらのCSにおいても取得する一方で、水上村近辺のMRIが研究用に耐えうる性能でないことがわかったため、脳画像による効果検証については、札幌市CSのみ(北海道大学医歯学総合研究棟の研究用3テス

ラMRI設備)で行っていく予定である。

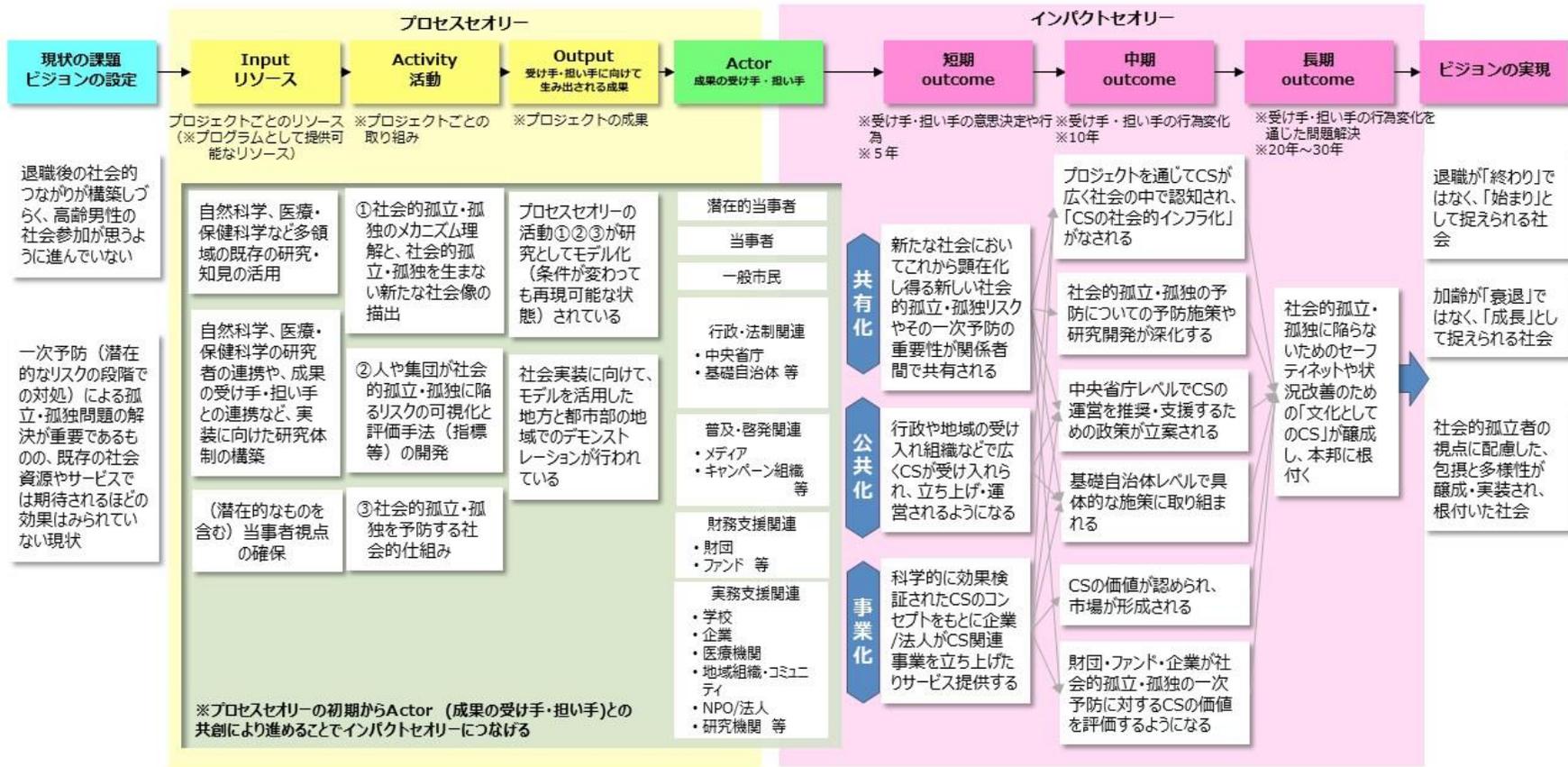
(2) 本格研究開発期間に孤立リスク可視化ツールの妥当性検証までを完了し、続いて社会実装する。当初の計画では、ツールを独自開発する予定だったが、プロジェクトスタート後にoSIMが多言語対応していないことが判明した。そのため独自に孤立リスク可視化ツールの開発を目指していたが、著しくコストと時間がかかることが判明した。結果的に、Chrome拡張を用いてオリジナルの可視化ツールであるoSIMを日本語化するシステムを開発する方向に方針を変更した。社会実装に際しては、地域の作業療法士や保健師等の支援者が住民を対象に実施・評価のサポートを行うことを想定している。これにより、高リスクと判定された人が既存のサービスを受けているかどうか確認したり、評価結果に基づいて適切なサービスを提供することが容易になる。加えて、地域診断として、その地域全体として社会的ネットワークにどのような課題があるのかを把握し、ポピュレーションアプローチを検討するためにも活用可能である。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

- Q1. CSは社会的孤立・孤独の一次予防に有効であるか？
- Q2. 孤立リスク可視化ツールは有効に機能するか？
- Q3. CS実施地域における孤立・孤独の構造とは？

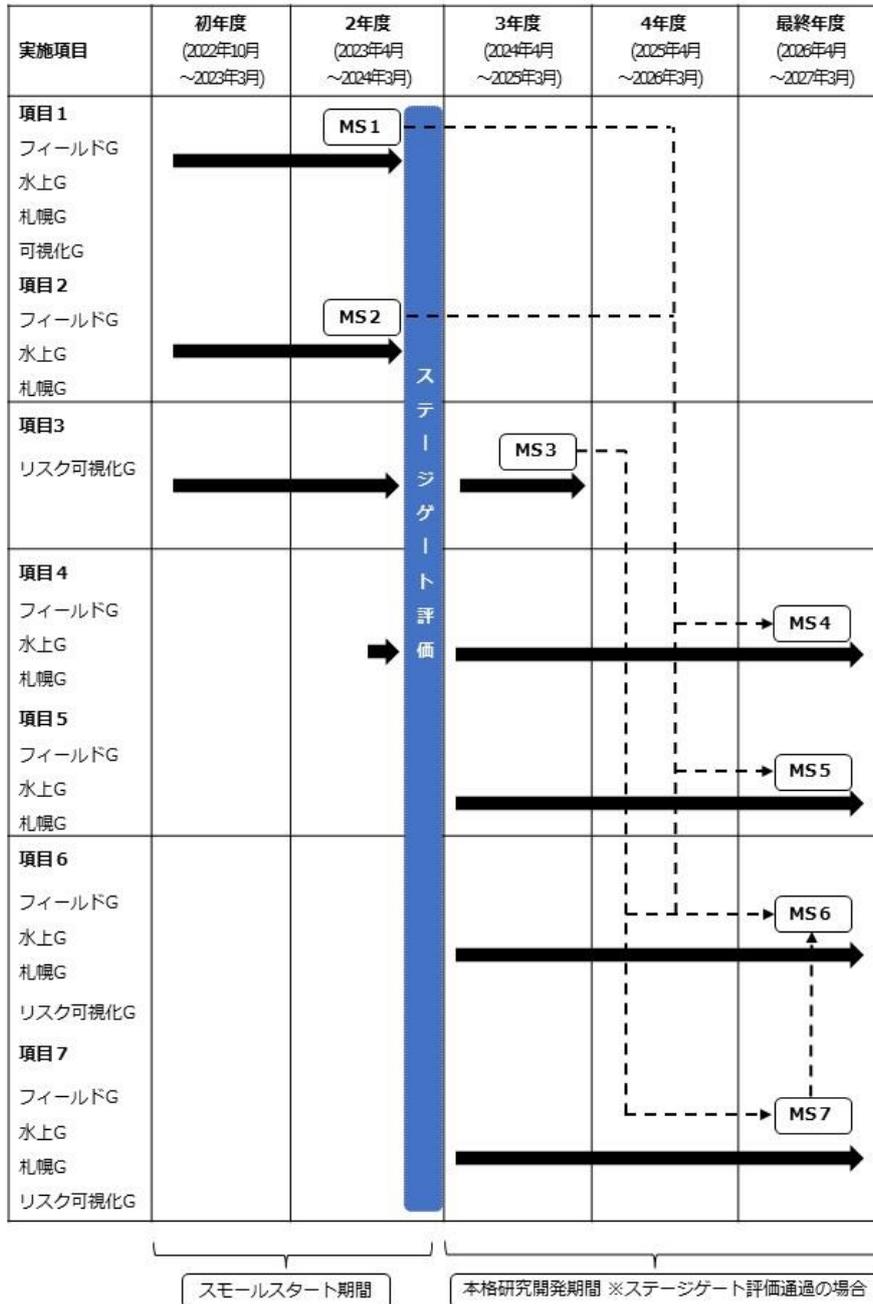
2-3. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)
 「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」ロジックモデル



2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール



マイルストーン (MS)

- MS 1 : 質的/量的混合アプローチによるデータ取得
- MS 2 : CSの継続運営に関わる要因の検討
- MS 3 : 孤立リスク可視化ツールの開発
- MS 4 : 水上村CSの立ち上げ・運営
- ステージゲート評価-----
- MS 5 : 札幌市CSの立ち上げ・運営
- MS 6 : CSの効果検証
- MS 7 : 孤立リスク可視化ツールの社会実装

(2) 各実施内容

当該年度の到達点①

(目標) シチズンサポートプロジェクトの実施へ向けた準備

実施項目①-1: 質的/量的混合アプローチによるデータ取得

実施内容: 高齢者を対象としたエスノグラフィーの手法を用いたインタビュー調査および参加観察(質的研究)、Web調査に基づく心理学調査(量的研究)を開始した。エスノグラフィーの手法を用いたインタビュー調査および参加観察(質的研究)は、主たる実施者である高島を中心に実施した。水上村では3~5日のフィールドワークを計3回実施し、合計29名(高齢男性19名、支援者6名、村をよく知る情報提供者4名)に個別のインタビュー調査を実施した。水上村での質的データ収集は完了したため、さらに分析を進める予定である。札幌市では、データ収集に着手した段階である。高齢者支援の場や集いの場での参加観察を計5日間実施し、高齢男性4名(全員、要支援の後期高齢者)にインタビュー調査を実施した。札幌市では更なる質的データ収集を継続する予定である。また、札幌市においては、Web調査に基づく心理学調査を若年者22名に対して実施した。

期間: 令和4年10月~令和5年3月31日

実施者: 伊藤 文人《高知工科大・講師》、東 登志夫《長崎大・教授》、松尾 崇史《熊本保健科学大・講師》、高島 理沙《北大・講師》、森内 剛史《長崎大・准教授》、丸田 道雄《長崎大・助教》、岡田宏基《北海道大・助教》、佐伯 和子《富山県立大・教授》、坂上 真理《札幌医科大学・准教授》、爲近 岳夫《熊本保健科学大・准教授》、宮田 浩紀《熊本保健科学大・講師》、河口 向日葵《熊本保健科学大・M1》、平山 理花《北大・B4》、玉井 颯一《チュービンゲン大・研究員》、出馬 圭世《高知工科大・教授》、鈴木 真介《一橋大・教授》、青木 隆太《東京都立大・特任准教授》、澤村 大輔《北大・講師》、吉田 一生《北大・講師》、梶村 昇吾《京都工芸繊維大・助教》、五十嵐 祐《名古屋大・准教授》、日道 俊之《高知工科大・講師》、大学院生

対象: 水上村・札幌市・その他地域の高齢者、成人等

実施項目①-2: CSの継続運営に関わる要因の検討

【項目1】2022年度はオーストラリアメンズシェッド協会、イギリスメンズシェッド協会、アイルランドメンズシェッド協会、カナダメンズシェッド協会が発行しているメンズシェッドの立ち上げ・運営に関するノウハウ集(ツールキットと呼ばれるもの)の情報を収集した。

【項目2】世界各地にあるメンズシェッドが1)どのような活動を、2)どの程度の頻度で、3)どのように収入を得ながら、実施しているかに関する情報を収集した。ソースはオーストラリアメンズシェッド協会、イギリスメンズシェッド協会、アイルランドメンズシェッド協会、カナダメンズシェッド協会等のホームページである。

【項目3】先行研究の調査を行うとともに、オーストラリアのメンズシェッドや日本のコミュニティサービス(一般社団法人えんがお)を訪問し、CSを継続運営できる要素をリサーチした。

期間: 令和4年10月~令和5年3月31日

実施者：伊藤 文人《高知工科大・講師》、東 登志夫《長崎大・教授》、松尾 崇史
《熊本保健科学大・講師》、高島 理沙《北大・講師》、森内 剛史《長崎大・准教
授》、丸田 道雄《長崎大・助教》

対象：国内外のコミュニティー・サービス、メンズ・シェッドなど

実施項目①-3：孤立リスク可視化ツールの構築

2020年にオーストラリアの研究グループによって開発されたオンライン社会的アイデンティ
ティマッピング (oSIM) をベースに、このツールの英語表記部分を日本語化するツール開発を
行った。当初、オリジナル版(英語版)の日本語化を目指していたが、ソフトウェア会社が詳
細な調査を行った結果、システムが多言語対応していないことがわかった。独自に開発を行う
ことも検討したが、日程や予算的に困難であったため、2022年11月より五十嵐(名古屋大)を
中心に、英語表記を日本語化するChrome拡張の開発を実施している。

期間：令和4年10月～令和5年3月31日

実施者：伊藤 文人《高知工科大・講師》、高島 理沙《北大・講師》、五十嵐 祐
《名古屋大・准教授》、日道 俊之《高知工科大・講師》

対象：一般成人等

実施項目①-4：水上村CSの立ち上げ準備

熊本県水上村において2023年後半からCSを実施するための準備として、村老人会への
出席・事業説明を継続的に実施した。また、1月～3月には高齢者の集いの場への訪問を行
い、草の根的に村民とのコミュニケーション、信頼関係の構築に努めている状況である。
また、役場関係者との定期ミーティング(月1～2回)を継続し、CS立ち上げに向けた役割
分担などを協議した。

期間：令和4年10月～令和5年3月31日

実施者：東 登志夫《長崎大・教授》、松尾 崇史《熊本保健科学大・講師》、森内
剛史《長崎大・准教授》、丸田 道雄《長崎大・助教》、爲近 岳夫《熊本保健科学
大・准教授》、宮田 浩紀《熊本保健科学大・講師》、河口 向日葵《熊本保健科学
大・M1》、大学院生

対象：水上村の地域住民

(3) 成果

実施項目①-1：質的/量的混合アプローチによるデータ取得

成果：社会的孤立・孤独メカニズム理解について、水上村での質的調査の暫定的な結果
としては、高齢男性が“寂しさ”を感じる背景には、村外の人である“まちもん(町の
者)”との避けられない交わりがあった。村内での仕事は限られており、村民であって
も村外で働く者がどんどん増えていく現状があった。“まちもん”の新しい価値観の
流入によって、自分たちが伝統的に重視してきた活動(例えば、神事)や人付き合いの
仕方における価値観が軽視されていくことに、疎外感や寂しさを感じていた。村内での
伝統的な活動の多くは“当番制”によって機能を維持していた。しかし、村全体の高齢
化と新型コロナウイルス感染症の蔓延による活動の中断が、“当番制”の存続の危機を
招いていた。当番の担い手が高齢化し、さらに担い手の数が減ることで一人当たりの負

担が過度になる事例が増えていた。活動の中断が長期になるにつれて、活動を再開する意欲がそがれ、伝統的な活動への価値観がさらに薄れていくことで、永久的な廃止も生じていた。現状は既存の人とのつながりがうまく機能し、例えば障害や疾患によって交流が困難等の理由を除いては、孤立はほとんど生じていないと感じている者が多かった。その一方で、村の伝統的活動が長い間、副次的にもたらしていた人とのつながり維持（孤立予防）の機能が危機に瀕することで、今後、孤立が進行していく前段階の状況も観察された。水上村での質的データ収集は完了したため、さらに分析を進める予定である。

社会的孤立・孤独メカニズム理解について、札幌市での質的調査の暫定的な結果としては、高齢男性の孤立の背景には、身体の衰えやエイジズムのような社会的価値観による活動参加の減少、高齢男性の特性である自尊心の高さや、孤立していく状況に「これで良い」と自分なりの理由を見いだすことによる合理的対処があった。また、人と過ごす時間とひとり時間とのバランスに対する自律性の高さやひとり時間の志向性は、生活への満足度や孤立への知覚に影響を与えていた。ひとり時間を好む傾向が強い者であっても、人と過ごす時間とのちょうどよいバランスがあった。人と過ごす時間に対する相対的なひとり時間の割合がその人にとって多すぎる状態になり、ちょうどよいバランスが崩れてしまうと、ひとり時間を楽しむことも難しくなり、孤立の知覚や孤独感を生み出す一つの要因になっていた。札幌市では更なる質的データ収集を継続する予定である。

実施項目①-2：CSの継続運営に関わる要因の検討

【項目1】2022年度はオーストラリアメンズシェッド協会、イギリスメンズシェッド協会、アイルランドメンズシェッド協会、カナダメンズシェッド協会が発行しているメンズシェッドの立ち上げ・運営に関する手引書の情報を収集した。CSの立ち上げに際して、1) 実施場所をどのように探すか、2) 参加者をどのように集め組織的に動いていくか、3) 地域住民たちとどのように付き合うか、4) 運営資金をどのように集めるか、などの多様な情報がまとめられていた。現在日本語版CS立ち上げ手引書（Ver. 0）作成に向け、現在まとめ作業を行っている。手引書Ver. 0が完成した後に、水上村CS・札幌CS立ち上げ・運営を通し得られたノウハウや知見など日本に適したCSの立ち上げ・運営ノウハウを組み込み、随時アップデートしていく。このアップデートはプロジェクト終了まで継続していくことを予定している。

【項目2】世界各地にあるメンズシェッドが1) どのような活動を、2) どの程度の頻度で、3) どのように収入を得ながら、実施しているかに関する情報を収集した（図1）。ソースはオーストラリアメンズシェッド協会、イギリスメンズシェッド協会、アイルランドメンズシェッド協会、カナダメンズシェッド協会等のホームページである。次年度は各国のメンズシェッドを対象としたオンライン調査を予定しており、この調査に向けて連絡先などの情報も収集した。得られた情報を整理・集約し、世界のメンズシ

の開発を実施している。oSIMの開発者であるUniversity of Queenslandの研究グループの承諾・協力も得ており、一般公開へ向けて準備を進めている。

実施項目①-4：水上村CSの立ち上げ準備

熊本県水上村において2023年後半からCSを実施するための準備として、村老人会や役場関係者との打ち合わせを継続的に実施した。水上村CSを継続可能な事業として確立するために収入を得る手段として「ふるさと納税」で確保することを検討している。ふるさと納税の返礼品として、水上村CSで作製した木工細工（焼印入りコースターや鍋敷き）を活用していただく予定であり、現在その準備を進めている。これらの木工細工は木材の加工から電気式の焼印、仕上げ作業など参加者の能力に合った工程を選ぶことが可能であり、作業レベルを幅広くすることでCS参加への敷居を低く感じてもらえるよう努めている。なお、CSで使用する木材等は廃校予定の学校にある桜の木などを確保するなど、着実に運用開始に向けて準備を進めている。また、参加者がいくつかの活動から興味のあるものを選択できるような仕組みづくりも検討している。木工以外にも園芸（コーヒー豆づくり）や竹炭窯作りなど村の男性が主体的に行いたいと思っている活動もあるため、積極的に取り入れていく予定である。

（4）プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. CSは社会的孤立・孤独の一次予防に有効であるか？

回答

スモールスタート期間において、この効果検証のためのベースラインデータを取得し、本格研究において、本格的な効果検証を進めます。オーストラリアなど諸外国ではすでに効果が広く認められており、全世界で3,000以上のシェッドが運営されていると言われています。熊本県水上村や北海道札幌市においても、地域の高齢者から良い反応をいただいております。検証結果がはじめるのはまだ先ではありますが、CSは社会的孤立・孤独の一次予防に貢献しようと考えています。

Q2. 孤立リスク可視化ツールは有効に機能するか？

回答

論文執筆段階ではあるものの、300名程度の方を対象にしたオンライン調査を行った結果、孤立リスク可視化ツールは日本人の孤立・孤独を有意に予測するという結果が得られています。今後、専門家による査読を経て、結果を公開したいと考えています。

Q3. CS実施地域における孤立・孤独の構造とは？

回答

水上村での質的調査の結果から、村民であっても村外で働く者がどんどん増えており、そうした“まちもん”の新しい価値観の流入によって、自分たちが伝統的に重視してきた活動や人付き合いの仕方における価値観が軽視されていくことに、疎外感や寂しさを感じている高齢者がいることが明らかになりました。札幌市での質的調査の暫定的な結果からは、高齢男性の孤立の背景に、例えば障害や疾患によって交流が困難等の理由を除いては、身体の衰えやエイジズムのような社会的価値観による活動参加の減少が明らかとなりました。また、高齢男性の特性である自尊心の高さや、孤立していく状況

に「これで良い」と自分なりの理由を見いだすことによる合理的対処も認められました。上記札幌市では更なる質的データ収集を継続する予定です。

※本研究プロジェクトでは、オーストラリア発祥の高齢男性向けの居場所（「メンズ・シェッド」と呼ばれる）を日本に導入し、社会的孤立・孤独の一次予防に貢献しうるか検証します。海外では広く「メンズ・シェッド (Men's shed)」という用語が使われていますが、本プロジェクトでは、「コミュニティー・シェッド (Community shed)」という用語を用いています。本プロジェクトにおいては特に高齢男性に着目するため「メンズ・シェッド」と「コミュニティー・シェッド」は同義です。しかしながら、コミュニティー・シェッドはジェンダーフリーかつ、「共同社会」という意味が含まれている表現です。将来的にコミュニティー・シェッドが日本に根付き、高齢男性のみならず多くの人々が多様なネットワークを築き、新たな生きがいを見つけられる居場所となることを願い、よりインクルーシブな用語を用いています。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

- ・プロジェクトの達成目標に対する現在の進捗状況。当初の予定より進んでいる点、遅れている点。その要因。

水上村・札幌市のCSの立ち上げに関しては、地域住民や支援者との関係づくりがスムーズに進んでいる。一方、これまでにない新たな取り組みであることや経費の問題から、CSの実施場所の選定が難航している。今後、地域のステイクホルダーとの協働を進め、予定通りのCS開始を目指している。可視化ツールの開発については、oSIMの日本語版開発が困難であることが判明してから、日本語化ツール(Chrome拡張)の開発へと梶を切った。これにより、予定よりも早く一般公開が可能になると考えている。

- ・各実施項目で得られた結果や成果を俯瞰・統合した結果分かったこと。

メンズシェッド先進国であるオーストラリアやイギリスの協会が発行している手引書の内容を分析やメンズシェッドの視察から、1) どのように運営を中心的に担うメンバーを集めるか、2) 立ち上げ場所をどのように確保するか、3) 運営や参加者の保険に関わる費用をどのように工面するか(活動資金を調達するか)、の3点がどの国においても極めて重要かつ困難な課題であることが明らかとなった。メンズシェッド先進国の場合、「メンズシェッド協会」が存在し、国レベルで情報提供や資金提供を行うサポートシステムが確立されており、こうしたシステムのおかげで地域住民が自発的にメンズシェッドを立ち上げることが可能となっていた。

- ・当該年度に明らかになった次年度に向けての課題とその解決方法の検討。

日本における既存のサービスや通いの場とCSがどのように差別化できるのか検討することから、プロジェクト内でワーキンググループを立ち上げ、解決へ向けて作業を始めている。「研究開発としてのCS」を目指す必要があることから、水上村および札幌市でのCS運営が単なる事例報告とならないよう、地域によらずCS運営のコアとなる要素を抽出し、日本語版CS立ち上げ手引書に反映することで、解決を図る。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
11/8	水上村役場とのミーティング	水上村役場	プロジェクト概要の説明・打ち合わせ
11/8	水上村フィールド調査	水上村	地域住民を対象としたインタビュー調査・参与観察等
11/14	キックオフミーティング	オンライン	プロジェクト概要の説明・打ち合わせ
11/21	水上村定期ミーティング	水上村	水上村のステイクホルダーとのCS準備に係る打ち合わせ
12/6	水上村CSミーティング	オンライン	CS立ち上げ準備に係る進捗報告・打ち合わせ
12/6	コアミーティング	オンライン	プロジェクト全体の進捗報告・打ち合わせ
12/14	水上村定期ミーティング	オンライン	水上村のステイクホルダーとのCS準備に係る打ち合わせ
1/10	コアミーティング	オンライン	プロジェクト全体の進捗報告・打ち合わせ
1/16	水上村定期ミーティング	水上村	水上村のステイクホルダーとのCS準備に係る打ち合わせ
1/17	一般社団法人えんがお視察	一般社団法人えんがお	一般社団法人えんがお視察および代表との意見交換
1/23-26	水上村フィールド調査	水上村	地域住民を対象としたインタビュー調査・参与観察等
2/8	コアミーティング	オンライン	プロジェクト全体の進捗報告・打ち合わせ
2/14	伊藤PJ戦略会議	JST東京本部	プロジェクト全体の進捗報告
2/21-22	熊本保健科学大学・長崎大学研究打ち合わせ	熊本保健科学大学	水上村CSおよびoSIMの実施準備に係る打ち合わせ
2/27	水上村定期ミーティング	水上村	水上村のステイクホルダーとのCS準備に係る打ち合わせ
2/27-3/1	メンズシェッド視察	ブリスベン	メンズシェッド3箇所の視察および意見交換
2/28	oSIM打ち合わせ	University of Queensland	開発者のProf. Alex HaslamらとoSIMに関する打ち合わせ
3/7	水上村CSミーティング	オンライン	CS立ち上げ準備に係る進捗報告・打ち合わせ

3/7	伊藤PJ全体会議	オンライン	プロジェクト全体の進捗報告・打ち合わせ
3/13-15	水上村フィールド調査	水上村	地域住民を対象としたインタビュー調査・参与観察等
3/20	水上村定期ミーティング	水上村	水上村のステイクホルダーとのCS準備に係る打ち合わせ

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

oSIMについては、2023年度にCSを立ち上げる熊本県水上村にて、ベースラインデータ取得の際に使用予定である。引き続き、札幌市でも使用していく。

4. 研究開発実施体制

可視化グループ (伊藤 文人)

高知工科大学 フェューチャー・デザイン研究所

実施項目： 質的/量的混合アプローチによるデータ取得

スモールスタート期間において、質的/量的混合アプローチによるデータ取得の一部 (Web調査および脳・心理調査) をメインで担当することとなる。

実施項目： 可視化ツール開発

スモールスタート期間から孤立リスク可視化ツールの開発をスタートする。online Social Identity Mappingをベースに独自に開発を進める。

フィールド支援グループ (東 登志夫)

長崎大学 生命医科学域 (保健学系)

実施項目： 質的/量的混合アプローチによるデータ取得

スモールスタート期間において、質的/量的混合アプローチによるデータ取得の一部 (インタビュー調査に基づく当該地域での社会的孤立・孤独・CSに対するニーズの理解、健康調査) をメインで担当することとなる。なお、適宜参加観察も行っていく予定である。

実施項目： シチズンサポートプロジェクトの実施

水上村および札幌市においてCSの立ち上げ・運営を担当する。スモールスタート期間の終盤に水上村CSを立ち上げる予定としており、本格研究開発期間の初期に札幌市CSを立ち上げる予定である。

5. 研究開発実施者

可視化グループ（リーダー氏名：伊藤文人）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
伊藤 文人	イトウアヤヒト	高知工科大学	フューチャー・デザイン研究所	講師
五十嵐 祐	イガラシタスケ	名古屋大学	大学院教育発達科学研究科	准教授
日道 俊之	ヒミチトシユキ	高知工科大学	経済・マネジメント学群	講師
河地 庸介	カワチヨウスケ	東北大学	大学院文学研究科	准教授
鈴木 真介	スズキシンスケ	一橋大学	ソーシャル・データサイエンス学部	教授
出馬 圭世	イズマケイセ	高知工科大学	経済・マネジメント学群	教授
青木 隆太	アオキリュウタ	東京都立大学	人文科学研究科	特任准教授
玉井 颯一	タマイリュウイチ	テュービンゲン大学	Hector-Institut für Empirische Bildungsforschung	研究員
澤村 大輔	サワムラダイスケ	北海道大学	大学院保健科学研究院	講師
吉田 一生	ヨシダカズキ	北海道大学	大学院保健科学研究院	講師
梶村 昇吾	カジムラシヨウゴ	京都工芸繊維大学	情報工学・人間科学系	助教

フィールド支援グループ (リーダー氏名：東 登志夫)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
東 登志夫	ヒガシトシオ	長崎大学	生命医科学域 (保健学系)	教授
森内 剛史	モリウチタケ フミ	長崎大学	生命医科学域 (保健学系)	准教授
丸田 道雄	マルタミチオ	長崎大学	生命医科学域 (保健学系)	助教
松尾 崇史	マツオタカシ	熊本保健科学大学	保健科学部	講師
爲近 岳夫	タメチカタケ オ	熊本保健科学大学	保健科学部	准教授
宮田 浩紀	ミヤタヒロノ リ	熊本保健科学大学	保健科学部	講師
河口 向日葵	カワグチヒマ リ	熊本保健科学大学	大学院保健科 学研究科	大学院生
銚之原 将希	ホコノハラ マ サキ	熊本保健科学大 学	大学院保健科 学研究科	大学院生
吉瀬 陽	キチセヨウ	熊本保健科学大 学	大学院保健科 学研究科	大学院生
高島 理沙	タカシマリサ	北海道大学	大学院保健科 学研究院	講師
佐伯 和子	サエキカズコ	富山県立大学	看護学部	教授
坂上 真理	サカウエマリ	札幌医科大学	保健医療学部	准教授
岡田 宏基	オカダヒロキ	北海道大学	大学院保健科 学研究院	助教
平山 理花	ヒラヤマリカ	北海道大学	大学院保健科 学院	B4

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

該当なし

6-1. シンポジウム等

該当なし

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

該当なし

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・サイト名：国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター（JST-RISTEX）SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築） 2022年度採択「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」紹介ホームページ

URL: <https://www.ristex2022csjapan.com/>

立ち上げ年月：2022年12月

- ・SNSアカウント：@MensShedsJapan

URL: <https://twitter.com/MensShedsJapan>

立ち上げ年月：2022年10月

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

該当なし

6-3. 論文発表

(1) 査読付き（___0___件）

●国内誌（___0___件）

●国際誌（___0___件）

(2) 査読なし（___0___件）

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議___0___件、国際会議___0___件）

(2) 口頭発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(3) ポスター発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (0 件)

(2) 受賞 (0 件)

(3) その他 (1 件)

・高知工科大学プレスリリース

<https://www.kochi-tech.ac.jp/news/2023/005948.html>

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)